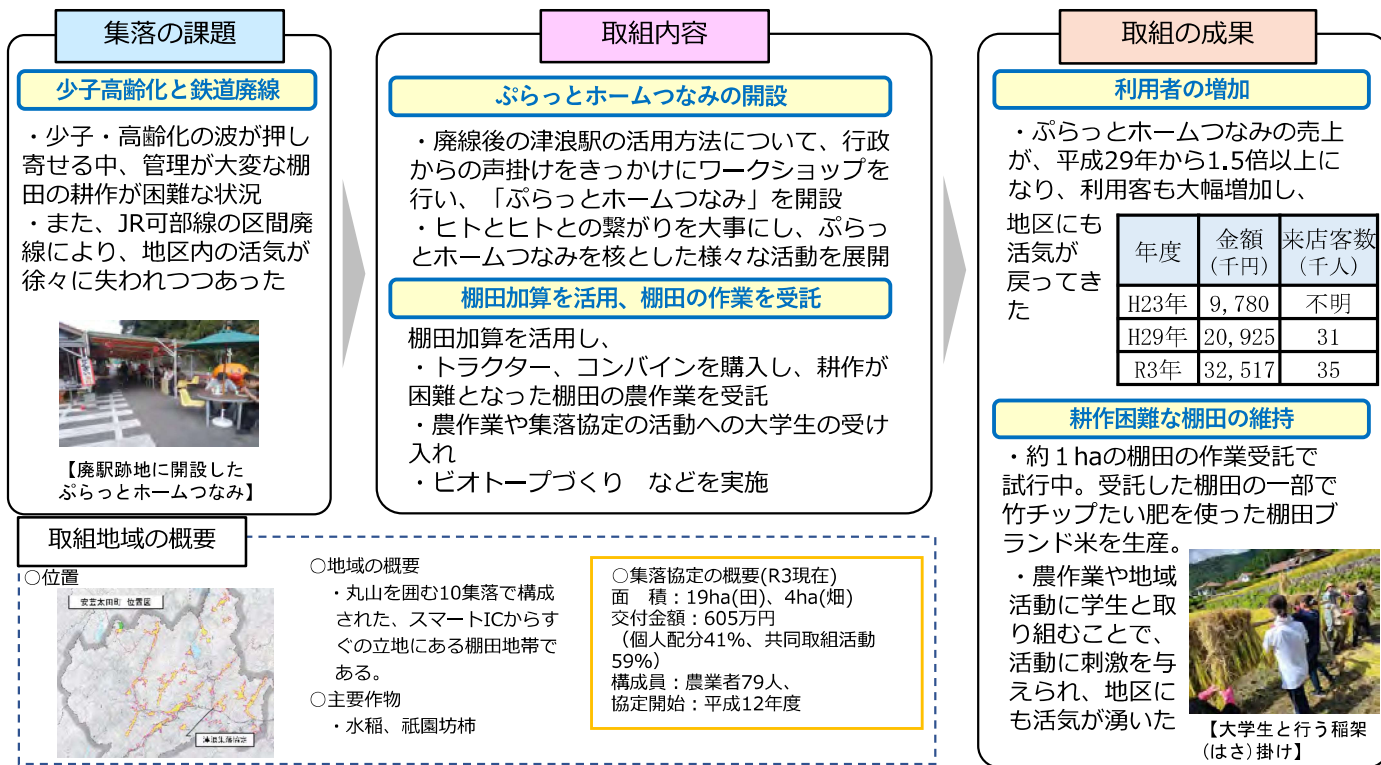


人情の駅「ぷらっとホームつなみ」を中心とした様々な地域活動

- 廃駅を活用したぷらっとホームを核に、棚田加算を活用しつつ、様々な地域活動を積極的に展開
- 大学と連携し、学生と農作業やビオトープづくりに取り組むことで、活動が活性化



1 実施地区の概要

つなぐ棚田遺産に認定された「津浪の棚田」

——実施地区の特徴を教えてください。

津浪地区は、広島県安芸太田町の南東部に位置しており、丸山を囲む10集落で構成されています。中国自動車道の加計スマートICからすぐの立地のため、広島市内から車で1時間程度で来ることができ、土日は丸山の登山客、カタクリ等の開花時期は観光客で賑わいます。

地区の大部分を占める棚田は、令和2年に「津浪の棚田」として棚田振興法の指定及び同法の活動計画の認定を受け、令和3年には、つなぐ棚田遺産に認定されました。その他に、祇園坊柿を加工した干し柿はギフトとして人気で、生産が追い付かないほどです。

中山間地域等直接支払交付金には、平成12年の制度創設期から取り組んでおり、協定参加戸数は71戸から79戸に増加しています。

2 集落の抱える課題

少子・高齢化の波が押し寄せる中、JR可部線の廃線が決定打

——集落にはどんな困りごとがありましたか？

少子・高齢化の波が押し寄せてくる中、棚田での耕作の継続が課題でした。また、地元の津浪小学校が廃校になり、豊かな自然に囲まれた地区の棚田の良さを子供たちに十分に伝えることが難しくなってきました。

問題はたくさんありましたが、一番は、この後にも述べますが、JR可部線の廃線後の津浪駅の活用でした。

——その原因はどこにあったのでしょうか？

平成15年にJR可部線の区間廃線により津浪駅が廃止になりました。廃止前は紅葉シーズンには4両編成の特別列車が満車になるほどの賑わいでした。それが廃線になると、これまで車で来ていた人たちも来なくなる負の連鎖になっていました。これらにより、地区内の活気が徐々に失われつつありました。



【津浪地区の春の棚田】

3 取組の経緯

みんなの思いが詰まった「ぷらっとホームつなみ」

——取組を開始したきっかけは何ですか？

後につながる様々な取組のきっかけは、ぷらっとホームつなみです。ぷらっとホームつなみは、津浪駅跡地の利用方法を検討する中で整備に向けて構想を進めました。具体的には、津浪駅の廃止後に4年かけて、町と津浪振興会とでワークショップを行いました。この中で、バスを待つ間に必要なトイレが欲しいとか、自分たちが何が欲しいかアイデアを出し合うところから始まりました。ワークショップを経て、直売機能、軽食機能、トイレ等の休憩機能を持つ複合施設を整備することにしましたが、約80平方メートルと非常に小さな面積に機能を詰め込んだため、平成23年の開設当初は非常に手狭な施設になりました。



【アットホームな雰囲気の「ぷらっとホームつなみ」】

——取組のキーパーソンを挙げるとしたらどんな人になりますか？

地区の活動の意思決定は、津浪地区の10集落の住民で構成する津浪振興会において行っています。津浪集落協定の構成員は、津浪振興会の構成員に含まれるので、振興会において併せて集落協定の意思決定を行っています。

津浪振興会では、役員を中心にそれぞれがアイデアを出し合っているのですが、ぷらっとホームつなみに関しては、最初に話のきっかけを作っていたのは役場でした。ワークショップでも議論の中心的な役割を果たしてくれました。

4 取組の内容

地域には実は資源がたくさんある！積極的に新しいことにチャレンジ！

——どのような取り組みを行っていますか？

津浪地区では、本当に様々なことに取り組んでいます。核となるのはぷらっとホームつなみの運営です。このほかにも、津浪振興会において、耕作が困難となった棚田の農作業の受託、広島市内の大学と連携した棚田での農作業や集落協定活動への大学生の受け入れ、ビオトープによる棚田保全、希少植物の保全、竹チップを活用したたい肥生産を行うなど、多岐にわたる取組を行っています。

——取組の初期はどのようなことを行いましたか？

どの取組も、最初は「よいと思ったらまずはやってみる」「そうすれば徐々に地域に定着してくる」という考えのもと、がむしゃらに取り組んできました。

具体的には、ぷらっとホームつなみは、地域の人たちに必要な施設を作ろう、というしっかりした方針はあったものの、肝心の資金がない状態でした。しかし、津浪駅の跡地が、このままでは空き地になってしまい、地域のターミナルになるような施設が必要でもあったので、国の補助金を活用しつつ、その時あった資金の範囲内でできる規模の施設から始めました。直売コーナーでは、最初は地元の農家約30戸が出荷し、年間売上300～400万円という状況でした。

——その後、地区の取組はどのように展開していききましたか？

登山ブームで観光客が増加し、ぷらっとホームつなみが手狭になったため、平成23年に店舗を拡張しました。自分たちが必要なことから始めて、観光客向けにシフトしていった流れです。希少植物であるカタクリやホソバナコバイモの保護活動もその一環です。

このほかにも、先進地視察を行ったビオトープの設置や竹チップたい肥の生産を始めました。結果は後からついてくる、という気持ちで新しいことに積極的にどんどん取り組むようにしています。

ビオトープは、子供たちが集まりやすいよう学校跡地に近い棚田に作り広島市内の大学とも連携して令和4年度から取組をスタートしました。

竹チップたい肥も、厄介者の孟宗竹の伐採と有効活用の一石二鳥を目指して平成29年度からはじめ、令和4年度からは、さらに竹チップたい肥を使った棚田ブランド米を販売する予定であり、一石三鳥になりそうです。



【大学生とのビオトープでの活動】

5 取組の成果

観光客の増加に伴い、ぷらっとホームつなみの売上も増加

——取組の成果として、具体的にどんな変化がありましたか？

令和3年のぷらっとホームつなみの売上は、平成29年から1.5倍以上に増え、3.5万人（レジ通過人数ベース）の方に利用していただきました。

また、大学との連携により学生から自分たちが持っていない新しい発想をもらうなど、いろいろな刺激を受けています。何より、若い学生が歩いているだけで、地区に活気が湧きます。

——農地の保全状況はどのように変わりましたか？

地区の農地面積は何とか維持し続けてきましたが、棚田の石垣の除草には除草剤を使えず、作業が本当に大変で、耕作を継続できない人が出てきています。

このため、中山間地域等直接支払交付金の棚田加算を活用し、トラクターとコンバインを導入し、今年度から協定が農作業を請け負うことにしました。オペレーターの高齢化もあり、請負面積が今後増加してくると、どこまで受け入れられるかの不安はあります。

年度	金額 (千円)	来店客数 (千人)
H23年	9,780	不明
H29年	20,925	31
R3年	32,517	35

【「ぷらっとホームつなみ」の売上金額と来店客数】

6 人材、資源、制度の活用方法、工夫

「ヒト」が繋げる地域の活動

——中山間地域等直接支払交付金はどのように活用しましたか？

ぷらっとホームつなみの運営費の一部として、備品の購入等様々な事業展開の資金、体験会等の講師料に中山間地域等直接支払交付金を活用しています。このほか希少植物の保護のための除草作業員の手当等に同交付金を充てています。

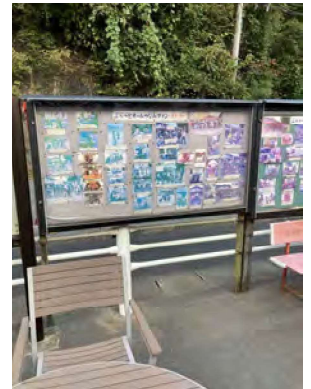
また、棚田加算を活用し、耕作が困難となった棚田の農作業を受託するためのトラクター、コンバインの購入、広島市内の大学と連携した農作業や集落活動への大学生の受け入れ、ビオトープづくりの際の活動費に充てています。

——地域の資源や人材はどのように活用しましたか？

ぷらっとホームつなみでは、地域の新鮮野菜のほか、孟宗竹の竹チップたい肥や棚田米、祇園坊柿等を販売しています。また、これまで、地域にあるのが当たり前すぎて魅力に気づかなかった希少植物も観光資源となっています。

何より一番大事なものは、「ヒト」です。人と人の繋がりが次の活動や地域の活性化に繋がると考え、津浪振興会の役員それぞれが個性を活かしながら積極的に人と交流することにしています。

その象徴が、ぷらっとホームつなみです。来客者に積極的に話しかけ、希少植物の道案内などもしています。また、来客者の写真を撮らせてもらい、掲示板に貼っています。すると、その写真を見に、おじいちゃん、おばあちゃんも来客してくれるので、お客さんの輪が繋がっていきます。写真は年間500人ぐらい撮っているほどです。



【来客者の写真の掲示により繋がる輪】

7 苦勞した点、克服方法

住民の理解が何よりも大事

——取組を進める上で特にどんなことに苦勞しましたか？

今でも完全に克服できているわけではありませんが、津浪振興会の活動を地域の方々に理解していただくことに苦勞しました。特に、非常に幅広い取組を行っているため、それぞれの意義や必要性を、しかも津浪地区の10集落の方に理解いただくことは非常に大変です。

——その苦勞を克服できた要因はなんですか？

活動を地区内の住民に理解してもらうため、毎月のニューズペーパーを配布しています。また、コロナ禍以降、コミュニケーションが大変になっていると感じます。いろいろな事柄に対し、個別に説明に向くことが大事だと考えています。

8 集落の今後、他の地域に伝えたいこと

続けることは大変。でも「まずはやってみよう」!

——今後、集落はどんなことを目指すのですか？

今後も、ふらっとホームつなみを核とした地域活動を展開していきたいと考えています。施設を増設して更なる事業の拡大ができたらと考えています。

また、耕作できない農地が今後増えてくることが予想されるため、荒れないように、集落協定では受託面積を拡大していく必要があると考えています。ただ、管理に手間が掛かる棚田の面積をどこまで拡大できるか、オペレーターを今以上に増やすことが難しい中、対応を考える必要があると感じています。

——同様の問題に悩む他の集落に伝えたいことはなんですか？

少子高齢化が進む中山間地域で集落の活動を継続することは大変です。特に、新型コロナにより活動がしにくくなっていますが、活動は一度やめてしまうと、なかなか再開することはできないため、大変でも、感染症対策を取りながら継続し続けることに意味があると思います。

中山間地域では、高齢化による耕作者の減少など、どこも先行きが不安な状況下だと思います。そのような中、集落外の人も巻き込み、刺激を受けながら、「まずはやってみる」の精神で、閉じこもらずに積極的に取り組むことが重要だと考えています。